

體の立論は、世に黒船の渡來、公武關係の破綻の如きは幕府崩壞の原因ではなく、僅かに其の一の機會を與へたものであると説くものがあるけれども、維新の政變は黒船の出没に目覺めたる識者が主として政治的に他國の侵害から免れんとする國家擁護の運動であつた。従つて明治維新は經濟狀態の變化に伴ふ社會動因の外に、獨立して行はれた政治運動を基調とせるものと見做さねばならぬ。即ち夫れは黒船の渡來に端を發し、王政復古、廢藩置縣に一段落を告げた政變であつた。然るに王政維新を論ずる者、概ねそれを以て全然經濟上の事由に基づくものとなし、遂に生ける維新の精神を没却せるは不自然にして且つ偏狹なる觀察であるとい説いてある。卷末に維新史研究の参考書と詳細なる索引を附してあるのは讀者にミつて至便である(四六版二六四頁、東京ロゴス書院發行價九五錢)(松野)

●郷歌及び吏讀の研究

(京城帝國大學法文學部紀要第一)

京城帝國大學教授
文學博士 小倉 進平著

十數年來、朝鮮語の歴史的研究に没頭して來た著者の努力の結晶である。第一編に於ては新羅時代の歌謠である郷歌の研究、第二編に於ては新羅時代に創制されて以後公文書等に使用せられた吏讀の研究を説述し、第三編に於ては以上の研究に直接關係ある「母音調和」「모음조화」の變遷「謙讓の助動詞の變遷」に關する論文を添へてゐる。本書は著書の希求する様に、新羅時代の言語の一斑及び新羅時代の言語と後世のそれとの關係の一般を窺ふべき資料たるに論勿く、歴史家が、殊に朝鮮古代文化の研究者にミつては最も感謝すべき礎石を與へるものであらう。著者の努力に依て解讀を可能にした郷歌二十五首は彼民族の有した素朴な戀愛、敬虔な法悅の心境を和かな姿で示してゐる。これに依て三國史記、三國遺事等の記録によつて示されるもの以上に沈潜して彼の古代精神の本質に觸れる事が出来る。著者の困難とてゐる所ではあるが、佛敎漢學の影響を蒙れるものも然らざるもの、純粹に韓民族固有のものも支那文化の影響を受けたものもが明辯せられ、それらの時代的配列が可能にされるならば

朝鮮史研究者にまつては一層幸便であらうが。(四六倍版五九八頁、京城近澤商店出版部發賣)〔布村〕

●平安南北道の方言 文學博士小倉進平著

京城帝國大學法文學部研究調査冊子の第一集である。

先づ調査地方の政治的沿革を顧慮する事によつて漢の四郡時代に土語の外支那語が公用語として用ひられたるべき事七百年に亙る高句麗統治の結果その系統の言語の殘存すべき事高麗朝に後女眞語の影響ありしならん等の推察を試みこの見地より音韻、語法、語彙等につきその分布系統等を調査せるものにして其間上述の如き推察を實證するものがあつて興味がある。(菊版五七頁、京城帝國大學發行、〔肥後〕)

●島根縣史八 尼子毛利時代下 島根縣學務部編

本書は、昨年五月出版された第七卷の尼子毛利時代史を完結し續いて藩政時代に及べるものであつて、先づ尼子晴久、同義久、次に毛利元就及輝元の事蹟を詳述し、其後に當時の産業、内外の通商、著名なる儒僧の事を説き、最後の藩政時代の章は僅かに堀尾氏初代の事に留め

である。前卷と同様に多數の古文書を引用して複雑なる當時の史實を詳叙してあるが、就中大森銀山の争奪の事を記せる所に此の銀山は産銀の多額なるを以て前に大内尼子兩氏、後に尼子毛利兩氏が之を争奪して己が金穴に爲した、毛利元就は弘治二年に此の銀山を領有し永祿元年に尼子氏に奪還されたが、同二年に彼が正親町天皇の御即位御料として銀五十九貫餘を獻納したのは全く此の銀山を採掘して置いたに依るものである事を述べ、又産業の章では其頃の物價、租物、銀山、製鐵と鐵工業の事を調査し、内國通商の章では此地方の重要商品は鐵であつて、宇龍港にて北國船因州但州船は船役を小野氏に納め尼子家より免許の印判を得た船は其の印判役を小野氏が徴收して之を尼子家に進納した事、これらの船が寄港通商をなすには問屋が必要であつた事を述べ、外國修交通商の章では出雲國守京極持清が朝鮮と通交した事、出雲に於ける通商港は美保關と宇龍とであつて殊に宇龍では尼子時代に最も盛に行はれ、唐船の舟役は小野家の領する所であつた事等を述べてあるのは經濟、通商史方面の